

令和5年度第3回横浜市創造界限形成推進委員会会議録	
日 時	令和6年3月22日（金）10時00分～13時50分
開催場所	横浜市役所 18階共用会議室 さくら14
出席者	野原委員長、六川副委員長、遠藤委員、岡本委員、菅野委員、治田委員、日沼委員、簗谷委員
欠席者	山口委員
オブザーバー	青木氏、恵良氏、岡田氏、加藤氏、呉宮氏、細淵氏、山野氏
開催形態	一部非公開
議 題	<p>1 審議事項</p> <p>(1) 令和5年度事業仮評価及び令和6年度事業計画について</p> <p>(2) 分科会での審議事項の承認について</p> <p>2 報告事項</p> <p>(1) 旧第一銀行横浜支店運営事業者公募の進捗状況について</p> <p>(2) その他</p> <p>3 その他</p>
決定事項	
事務局	<p>【開会】</p> <p>○令和5年度第2回横浜市創造界限形成推進委員会を開催する。</p> <p>【挨拶】</p> <p>○にぎわいスポーツ文化局文化芸術創造都市推進部長から挨拶が行われた。</p> <p>【拠点ディレクター紹介】</p> <p>○各拠点ディレクター及び急な坂スタジオの新ディレクターの紹介が行われた。</p> <p>【資料確認】</p> <p>○配付資料の確認が行われた。</p> <p>【定足数の確認】</p> <p>○委員9名中8名（うち2名、オンライン）が出席しており、委員会は成立となる。</p> <p>【会議の公開・非公開】</p> <p>○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により、会議は原則公開となるが、報告事項については、同条例第7条第2項に基づき非公開とするが、よろしいか。</p>

(了承)

1 審議事項

(1) 令和5年度事業仮評価及び令和6年度事業計画について

野原委員長

○審議事項(1) 令和5年度事業仮評価及び令和6年度事業計画について、各拠点ディレクターから説明をお願いする。初黄・日ノ出町地区よりお願いする。

山野氏

○令和5年度の振り返りとしては、事業や地域交流など、ほぼコロナ以前と同様に平常に戻ってきている。一番特徴的なのは、レジデンス希望者の数が増大、特に海外からの希望者が増えているため、施設の整備が追いついていないという点である。

○また、一昨年ぐらいからスタッフの多国籍化を図っており、現在3か国、日本人を含め4か国となった。コロナ後、国際交流が本格化し、行き来が割と自由になったため、海外への訪問、海外からの視察についても、需要が大変増えている。海外との交流が重要になるという見通しの下、スタッフの国際化を今後も進めていく。

○もう一つの課題は、施設の老朽化である。元々安普請の物件をリノベーションしながら使っているが、かなり劣化が進んでいる。それに伴い改修工事費がかさんでしまう状況である。

○年度末に大きな展覧会（黄金町バザール）を実施したことは相当大変であった。年間を通して、春夏秋冬のプログラムを組んで展示をやってきたが、さらに3月の途中からもう1本展覧会を実施することになり、資金繰りで少し苦労がある。

○昨年度の状況としては、コロナ前の元に戻りつつあるということと、金銭面で厳しいというところ。

○次年度の大きな方向性としては、国際交流化がさらに進んでいくと考えられる。直近では台湾の企業から事業連携の申出があり、中国の成都からは、公募展の審査の依頼もあった。また、交換プログラムになるかどうかは未定だが、アーティスト派遣を行いたいというブラジルからの申し出があった。今まではスペインのバスクで実施していた。さらに、中国の厦門大学から学生を派遣したいというオーダーもあり、国際化がどんどん進んでいくと思われる。

○今後は事業性を高めなければ、年間の予算が賄えないのではないかとこの状況。今まで横浜市からの補助金や、家賃収入で年間の予算をかなり賄っていたが、それだけでは不足がちになると考えている。そこで、民間事業者との連携を今後拡充していかなければならないと感じている。また、海外との交流についても、収入の面も考えて、交流を継続していかなければと思っている。

		<p>○最後に、NPO職員の高齢化について、来年度を若手への移行期間としたい。例えば事務局長及び事務局次長ともかなりの年齢になっているため、来年度から事務局次長には若い方をもう1人つけ、事務局次長は2人体制としたい。高齢のほうはアドバイザーなり、限定された委託業務等に特化し、本体は若手で運営していくということを考えている。これが来年度を移行期間として、再来年度からはその体制に変わりたい。</p> <p>○理事については、ほぼ高齢の男性という構成だが、それを何とか変えてほしいということは希望している。女性やアートの専門家が必要である。アート系の人間は私一人のみということもあり、やはり問題があると思っているため、今後、理事のほうも見直していきたい。</p>
野原委員長		<p>○日沼議長に補足をお願いします。</p>
	日沼委員	<p>○コロナ禍で非常に苦勞されていたものが今、上向きになりつつあるということだった。事業数、交流数を含めて非常に順調に伸びて、平常どおりに戻ってきている。分科会では、多くのアウトプットの中で、事業数などの増加ということをもう少し分析して、定性的な成果を示していただきたいということをした。</p> <p>○スタッフの問題については、事業性を高めるため、そして収益を増やしていくためのマンパワーの確保、ということにチャレンジされている途中だと思っている。日々議論しながら、スタッフの補充、国際化に向けての準備をしている。組織全体として、これからどのように事業運営をしていくかということは、今後の方向性の議論と整理を行った上で、スタッフ間で共有しながら進めていただきたいという話をした。</p> <p>○黄金町はアーティスト・イン・レジデンス事業が本当に柱になっており、特に海外からの需要が非常に高まってきている中、受入れのためのインフラ整備が非常に追いつかない状況である。横浜市との協定には国際交流が内容には入っていないものの、アーティスト・イン・レジデンスを続けていくためには海外交流は必須であるため、海外との交流事業を自主的に続けていかなければならないという課題がある。現在、パートナーシップを作っていくことで、そういった課題を解決し、いい方向性に向けて動いているということは評価していきたい。</p>
野原委員長		<p>○続きまして、象の鼻テラスについて岡田氏から説明、その後菅野議長から補足をお願いします。</p>

岡田氏

- 今年度は予算についてやや目減りするようなところがあったが、催事を減らす、人員を減らすということではなく、自助努力で従来並み、それ以上のパフォーマンスを出そうと取り組んだ。自助努力は、これまでと変わらず、協賛企業や団体にお声がけをするほか、幾つかの催事は参加料を徴収する工夫をしたり、新たな団体にテラスを利用いただいたりと、これまで以上の成果が上がった。
- 今年度の来場者数は、コロナ前とほぼ変わらない状況に戻りつつある。特に今年の夜間利用は、横浜市の事業と連動・連携する形で、SNACK ZOU-NO-HANAという時間外活用のフレームに積極的に取り組んだ結果、曜日、天候、プログラムの内容によって当然異なるが、1日当たりの来場者数が9,000人を超えるような日もあり、活況を呈している。1日で9,000人だと、館内はごった返し状態。
- 建物も15年近い時がたち、建物各所に綻びも出始めていて、市と相談をしながら、優先順位を決めて補修をしているが、そろそろ大規模改修も視野に準備しなければと感じている。そろそろキャパシティオーバーということも感じており、市には大規模改修と併せて増床、増設も検討してもらいたい。
- 前回、定性的な評価だけでなく定量評価についてもきちんと対応するよという指摘があったため、定期的にアンケートを取るなど、対応している。そこだけが活動の価値でないことは皆さん御了解いただいているところだが、定量的な数値を積み重ねることで説得力は増し、客観視できるという意味では非常に有用であるということを感じている。
- ウェブサイト、象の鼻のホームページの改修が完了した。
- 来年度の事業内容は、基本線は変わらず、アーティスト・クリエイターについては、創造的な市民を育むための良き伴走者であるという立てつけでプログラムを組んでおり、市民参加のプログラムを拡充していきたいと考えている。
- ダンス縁日という、夏場に市民ダンサーの方々を公募し、いろいろなタイプのダンスを踊ってもらうというイベントがあるが、今年はそのに加え、音楽のイベントということで、ワールドミュージックという取組をスタートしている。こちらも期待以上の参加があったため、継続していく。
- また、来年度は創造都市の20周年ということで、横浜市や他の拠点と連携を深める形で、ほぼ月1回、ディレクターズミーティングを開催し、協働できるポイントはないかを議論している。その中から、創造界隈の青年部というものを組織し、若手の方々が活躍できるような場や機会、責任をきちんと受け渡していけるような取組もスタートをしている。

		<p>○来年度の活動のテーマだが、新しい文化芸術創造都市の推進に向けて試行する年と位置づけ、考えるだけでなく、新しい創造都市って何？といったことを、具体的な取組の形にしていきたい。</p> <p>○コンセプトは、劇的に何かを変化させるということよりも、トリエンナーレとか、創造都市20周年とか、横浜市が取り組んできた事業においては非常に重要な年になるので、横浜市の事業との連携をさらに深めながら、効果的に創造界隈の活動がきちんと見えるような形にしていきたい。</p> <p>○園芸博覧会も控えており、「Tokyo Gendai」も今年の夏実施ということで、うまく連携をしながらやっていきたい。</p>
	菅野委員	<p>○委員会でも、象の鼻テラスの市民に伴走した事業内容にフォーカスしながら、安定的な運営をされていることに関しては、委員全員から高い評価を得ている。</p> <p>○評価にあたっては、定性評価、定量評価を心がけ、アンケート等を密に取っていただき、非常に把握しやすくなってきており、象の鼻テラスがどういった方々に来ていただいて、愛されているのかが非常に分かりやすくなった。その中でやはりリピーターが多いことが、象の鼻テラスが市民にどれだけ浸透してきているかということがわかる。分科会で委員が常に改善の余地があることを指摘した項目を、次の分科会には改善して反映していることも評価の高さにつながっている。</p> <p>○一方、20年という時間を経年して、建物自体が劣化してきていることは大きな課題であり、次のステップに向けての事業設計をどうしていくかが、これからの課題になっていく。</p> <p>○若手のスタッフたちのネットワークが出来てきたことは、安心材料であると感じた。それも含め、事業の中で自助努力をされていることは評価できる。例えば、ダンス縁日とワールドミュージックに参加されている市民層が非常に多く、演者側の参加費がこれまで無料だったものを1人1,000円の参加費にしてもクレームはなかったということもあり、こういった自助努力というのはこれからも続けていただきたい。</p>
	野原委員長	○続いて、THE BAYSの説明をお願いします。
	青木氏	○THE BAYSはフロアによって事業が分かれており、1階ではカフェ・レストラン、ショップ、地下ではヨガ教室、子ども向けのチアスクールなどを展開しているが、ここでは、CREATIVE SPORTS LABについて説明する。

野原委員長

- コロナ禍では、横浜スタジアムでリモートワークができる「ワーキングハマスタ」に取り組んだが、5類移行後は職場に出勤する方が非常に増え、利用者が減少しているため、今後の取組については、検討していく。
- スポーツ×クリエイティブということで、特にクリエイティブを切り口に、今までは新しい産業を生み出す、地域連携事業などを様々な形で取り組んできたが、思うような結果が出なかった中で、ビジネススクールは成果が出てきている。スポーツビジネスに興味のある方が非常に多いということがわかり、ここを切り口にしながら、今まで社会人向けにやってきたものを、今度は小学生から大学生までに幅を広げながら去年は取り組んだ。
- 特に大学生には、将来スポーツ業界で働きたいという方が非常に多く、毎回40名くらいの定員だが、それを大幅に上回る応募があり、ここに我々が進むべき方向にあるのではないかと感じている。
- 特に学生向けのビジネススクールでは、横浜や神奈川だけでなく、全国の大学生から応募がある。今年も熊本や新潟の大学生から申し込みがあった。
- 今年度は、命題である「新たな産業を生み出していく」というところをよりしっかりと、もっと幹の太いものにしていきたい。このビジネススクールを中心にもっと他の方とも組みながら、ようやく芽が出始めたところをもっと太いものにしていきたいなと思っている。
- THE BAYSは事業スキームがほかと違って、具体的に委託や補助での事業ではないため、いろいろ活動・取組が全体を通してどういう方向性に行っているのかが見えにくい状況がある。R5年度は全体で方向性を共有するための事業相関図というのを運営事業者と市で策定し、個々の事業が創造都市施策で求めている評価軸のどこにつながっていくのかを考え、THE BAYSの個々の活動がどの目標を達成するところに向かっているのかを整理した。
- 各階で個々の事業を実施しているが、それらを貫いて方向性を見いだしていくという検討をしている段階にある。
- この1～2年間、ビジネススクール事業にかなり力を入れており、来年度以降もそこで見出したものを軸に考えていくという意味で、「選択と集中」ができるが良い。
- スクールの成果についても、具体的に数だけで見ると、定員もあり1クール40名ぐらいだが、分科会では受講者が具体的にスポーツビジネスに転職したり、起業したいという話があるなど、外にアウトプットする人材も生まれつつあるということも報告があった。
- こういった具体的にどういう形で受講者が外に出てくるかというの

<p>加藤氏</p>	<p>を示せると、人材育成も行われていることが見える化される。そのあたりは、横浜市とも連携しながら、成果の発信も含め、進めていくことが大事である。</p> <p>○施設は文化財なので、制約条件が多く大変なこともあるが、文化財をうまく活用することも大事なことであるので、事業展開と文化財の保護の両方すり合わせながら、よりよい形を市と協力し合っ て見つけていってほしい。</p> <p>○続いて、急な坂スタジオの説明をお願いします。</p> <p>○今年度は、管理運営に関してはコロナが明けた印象があるが、舞台芸術業界としてはまだ難しい状況が続いている。</p> <p>○A F Fという大きな助成金制度（コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業）が昨年度で終わり、若い劇団が自分たちで劇場を借りて公演することが難しい状況になっている。また、コンスタントに公演をしていた団体も、年2回だったものが1回になるなど、厳しい状況が続いている。</p> <p>○業界全体の問題でもあるので、急な坂スタジオの貸し方のルールを少し流動的にしながら、少しでも借りやすい状況を整えつつ、時間をかけながら回復させていきたい。</p> <p>○事業は大きなものとしては2つあり、1つはS Tスポットが昨年度35周年、急な坂スタジオが2年前に15周年だったが、双方コロナ禍でイベントができなかったため、35周年プラス15周年、合わせて50周年という形で、横浜市内にある文化拠点も一緒にショーケース公演を行った。</p> <p>○観客の高齢化が問題になっているが、今回、ショーケースで20代から50代までの出演者の方々に声がけしたところ、客席も同様に20代から50代まで、客席にバリエーションが出たので、同世代が集まりがちだが、20年培ってきた時間を生かし、プレーヤーの年齢層を幅広く持つことで、観客も幅広く来るというのを実感した。</p> <p>○一昨日まで市庁舎のアトリウムにて、横浜トリエンナーレオープンプログラムのファミリーイベント「わくわくアートひろば」の中で、作家の佐々瞬氏と「ミルクを飲みながら」というイベントを実施した、毎日300人くらいの子どもたちでにぎわった。</p> <p>○横浜美術館をアトリウムに建築し、子どもたちに工作してもらって、どんどん飾りつけていくというワークショップで、ひっきりなしに親子連れの方に楽しんでいただけた。</p> <p>○佐々氏は、黄金町やBankARTでも活動していた作家で、急な坂でもアルバイトとして働いていた。20年前、創造都市が始まったときには、一若手アーティストとして横浜に来た彼が、今回は子ども連れで作</p>
------------	--

		<p>品を創作し、作品の現場にもいるということが、20年続いてきたことの成果を実感する機会となった。このイベントで、当時横浜で一緒に活動していたアーティストが、子ども連れ、家族で来てくれるなど、まず場所ができて人が集まり、それが有機的につながり、今度は家族と生活の場として横浜市に戻ってくるといったことが見られたことを、大切にしていきたい。</p> <p>○来年度から、一世代若くなったプログラムディレクターを任命したため、来年度の計画に関しては呉宮氏から説明する。</p>
	呉宮氏	<p>○来年度は大きく2つの事業を中心に、舞台芸術の創造活動の支援と人材育成に取り組む。</p> <p>○まずは1つ目に、サポートアーティストの募集を行う。急な坂スタジオの長年の中心的な事業だったサポートアーティストだが、新規募集は6年ぶり。アーティストが多くの時間を過ごすことになる稽古場として、5年先、10年先を見据えて活動に取り組めるように、集中できる創作環境の提供と、リソースを生かしたオーダーメイドの支援を行っていきたい。</p> <p>○2つ目に新たな取組として、創り手と書き手の交流プログラムを立ち上げる。批評家やライター、研究者などの書き手は、今現在の観客や創り手に対してだけではなく、その先の未来に向けて、作品とはまた異なる形で新しい視点や解釈の可能性を示し、価値を創造していく役割を担っている。「批評」の力が弱まっているとも言われているが、次の世代の書き手を支援すると同時に、創り手と書き手が対話を積み重ねる場、交流する場というのをつくっていく。</p> <p>○舞台芸術の実践と、それを取り巻く言説、言葉や思考の間に一方通行では終わらない相互作用をつくり出し、その中で舞台芸術が豊かに発展していく土壌を整えていくことを目指していく。</p> <p>○急な坂スタジオの強みは、日々複数の団体や個人が行き交う拠点であるということ、様々な背景や専門性を持つ人材が会って、共に学んで交流する場として、スタジオを機能させていくことを引き続き目指していく。</p>
	野原委員長	<p>○岡本委員より、補足をお願いします。</p>
	岡本委員	<p>○コロナの影響がある中で、開館時間を調整する、ホールと和室をセットで貸し出すなどの工夫のほか、横浜市からの業務委託を受ける、外部の助成金を獲得する、S Tスポットとの連携など、いろいろ状況に対応していただいていた。</p> <p>○国際交流事業についても、今年度は市からの委託によって韓国公演</p>

	<p>を実施したことや、例年ではあるがYPAMの機会にショーケースなどを実施することによって、海外からの来訪者にも知ってもらう非常にいい機会になっており、これが当初より続いているということも大きな価値の一つではないかと思う。</p> <p>○今年度から来年度にかけての一番の課題は、ディレクターの移行が挙げられる。結果としてプログラムディレクターの移行という形に落ち着いたが、順調に進んでおり、4月には正式に公表されるが、新ディレクターによる新しいプログラムも開始されるということで、非常に期待したい。</p> <p>○今後、創造都市全体の方向性が少し変化して、より地域や市民に開かれた方向になっていく中で、急な坂は元々アーティストの稽古場という特性があるため、それはしっかり守りつつ、新しい方向にどのように対応していくかは、市とディレクターとでよく相談しながら、どういう形がふさわしいのかということを見極めながら進めていくことを願い、期待している。</p> <p>野原委員長 ○続いて、BankARTの説明、その後、蓑谷委員から補足をお願いする。</p> <p>細淵氏 ○今年度、最初の計画と異なりのトリエンナーレが年度をまたぐスケジュールに変更となったことで、助成金などの経済面や連携という点で、事業が年度を跨げないという問題が生じた。そのため、トリエンナーレ前に1回事業を実施し、さらにそれをトリエンナーレにつなげるという通常とは違う事業進行となり、大変だった。</p> <p>○具体的には、みなとみらいのトラスト、ヨコハマポートサイドのトラスト、芸術文化振興基金、神奈川県助成金。その他、KAIKOでは三井不動産、Stationでは隣の横濱ゲートタワーと組んで、企業のお金でアートコーディネートをするといったことで、経済的にはかなり外のお金を取ってきた。取ってしまったがために、やらなければいけないということで、苦労があった。</p> <p>○秋にはポートサイドで「食とアートと人と街」という、食と現代美術の流れの展示、みなとみらいではアートテーブルを実施したが、施設の中での事業を進めながら、外展開を無理にやらなければいけない状況で、スタッフにも大変なところがあった。そのため、内部の基本的な事業、例えばカフェやパブ、ショップ、スクールのほうで、コロナ前のようにはできていないところがあり、そこをまた元に戻していくことが課題である。</p> <p>○外部の助成金が減ってきていることも要因であると思うが、BankARTの経済的な柱となっているコーディネート事業のオファーが少なくなってきており、自分たちで小さな自主事業をせざるを得ない状況</p>
--	--

であった。例えばPop-up Storeや、休養と回復など、外部からのオファーでありながら、経済的に厳しいという人たちに対して、こちらから主催事業に格上げする形で、コーディネートから主催事業として一緒に事業を実施するということもあり、事業的には忙しい年だった。

○各事業を何とかこなしながら、無事に1週間前、トリエンナーレも開幕し、ほぼ思いどおりの形のものでオープンできている。

○来年度に関しては、引き続きトリエンナーレから事業が始まり、その後、主催事業としては、島袋道浩さんの大きな個展を企画している。スタジオ事業や、「Under35」などは、例年とスケジュールを入れ替えながらも開催予定。昨年度に引き続き「Tokyo Gendai」に併せて「Under35」と島袋道浩さんの個展をぶつけるという形で企画している他、後半は、通常どおりコーディネート事業をこなしていけたら良い。

○大きくは経済的なところできちんと事業をやっているかというところが課題。加えて、例えば横浜トリエンナーレを例にとっても、本展とは経済的なレベルが違う中、それを見にくる人たちにとってはトリエンナーレもBankARTも同じように見られてしまう。スタッフやアーティストたちの協力によってどうにか成立しているが、何のためにこの事業をしているのか、大変な思いをして実施しているのか、というところを、向かうべき方向性を見失ってしまうと気力を失ってしまい、気持ちを継続していくのが難しくなってしまうところがある。そういう意味でも、横浜市の創造都市に対する方向性をきちんと明確にして、皆がそこに向かっていくということをきちんと共有できるようにしていただきたい。

菘谷委員

○5年度の事業については、外形的に言えば非常によくやっている印象。コーディネート事業が減り、世の中の助成金が減額傾向にある中で、BankARTとしてはしっかりと獲得しているし、市の補助金減額に対しても対応できており、外形的な事業の評価ということでは分科会の評価は高い。しかし、その結果小さな事業が増えてスタッフに過重な負担がかかっていることや、モチベーションを維持するためにも市の創造都市の在り方を明確にしてほしいという意見については、非常に重い課題だと感じている。

○分科会では、BankARTは次年度4月から協定の最終年度ということで、その次の年のことが確実ではないという中、中長期的な戦略を立てにくいという、将来の不確実性が課題として挙げられた。例えば、スタッフの負担がかかる中、雇用を増やすにしても、将来が不確実な中で人を増やしていいのかという判断ができないといった内容。他

	<p>の拠点でも同じことが言えるのかもしれないが、スキームだけではなくて、団体の組織体としての在り方みたいなことが関わってくるが、大きな団体が1事業としてそこで事業をやるのと、そこでしか事業をやらない1団体では全く意味が変わってくる。市のほうで、そういう事柄に対してどう考えるのかということを整理すべき。</p> <p>○評価シートの最後に第三者の客観的意見とデータというところがあるが、評価というのは、分かりやすいことが重要である。分科会にて、「Tokyo Gendai」と連携し、そこにはVIPも来たという報告で、それに対して市としても自信を持てたという言葉があった。VIPが来たことにどれほど価値があるのかというのは置いておいて、実際はVIPが来たことが、非常に評価されていると受け取られているということであり、そういう評価の分かりやすさは重要であると考え。</p> <p>○現代アートを本当に評価するのは、それ自体が難しいことなので、ここで言う第三者の客観的意見というのは、要は分かる人たちの評価である。クオリティーを維持するための評価が必要であって、人気を取るための評価とは違うのかと考える。</p> <p>○分科会にて、BankARTが非常に忙しいときにこの報告書を作り、ペシメスティックな気分の中で書いたとのことだったが、それに目を通してしていると、気持ちが落ち込んでくる。こういう事業はやはり明るい気持ちでやること、明るいプロジェクトであることが重要だと思っているが、そういう雰囲気ではなくなってきたことは心配している。</p> <p>○次年度以降に対しては、最終年度ということもあり、創造都市の芯になるようなBankARTの活動のクオリティーとか存在感みたいなものを改めて発揮することがその翌年に続くためにも重要だと思っている。</p> <p>野原委員長 ○5拠点からの報告を受け、横浜市からもこの全体1年間の総括をお願いしたい。</p> <p>事務局 ○今年度は特にコロナ禍が過ぎたという意味で、非常に各拠点の事業が例年に比べると大分本格化してきたというのを感じられた。市の予算が限られている中、外部の予算を取りにいくといった努力、各拠点の工夫があつてこそ、今年度の事業をやっていただけたと感謝している。</p> <p>○創造都市が20周年、各拠点も長く積み重ねてきた中で、独自の専門性やネットワークを生かしながら、先ほど話もあつた「Tokyo Gendai」や、横浜トリエンナーレのような、我々の公的な事業にそれぞれの拠点の方に追加で協力いただくことも多々あり、その中で、こ</p>
--	--

	<p>ういったコラボレーションが一緒にできるのかと、新たな発見もあった。</p> <p>○先ほど急な坂からも報告のあった市庁舎のアトリウムでのイベントは、急な坂の専門性を生かしつつ、お子さんにも楽しんでいただけるような仕立てとなっており、創造都市は誰もが楽しめるものである、というのを私たちとしても勉強になる機会をいただいた。</p> <p>○象の鼻もスナックゾウノハナや、夜間営業など、限定的だったところをさらに踏み込んでスキームを拡大するなど、そういった協力をいただけたのも今年度新たな発見であった。</p> <p>○一方、市としても新しい方向性を出さなければいけないという中、各拠点においても体制、高齢化、次世代育成といったことが共通の課題になってきている。市としても同じように課題に向き合って一緒に検討させていただきたい。</p> <p>○広報についても、各拠点の方々にだけ頼るのではなく、今後は市としても拠点全体を連携させながら、広く分かりやすい言葉で発信していきたい。</p>
野原委員長	<p>○全体の今の議論に対して、質疑、意見交換をお願いしたい。</p>
菅野委員	<p>○THE BAYSのいわゆるスポーツビジネスはこれから非常に重要になってくると思われる。大谷効果だけではなく、やはりこれから国際的に注目されていくものである。スポーツに関するビジネス、eスポーツなど、これまでと違う形でのスポーツへの取組というところがあり、THE BAYSにてスタートアップ支援や、ビジネススクールを展開していることは、今一番大切なところだと思う。大学でもスポーツビジネスをやっているところはあるが、数的にはまだまだ少ない状況。そういった中、横浜はスタジアムもあり、それを支援するこういった施設で、スポーツビジネスに関するスクールもあるというところは大変興味深い。カリキュラムやどういった講師陣なのか、教えていただきたい。</p>
青木氏	<p>○社会人向けのビジネススクールに関しては、ベイスターズの球団職員が、「スポーツビジネスとは」といった大枠の講義をしている。スタッフだけだとどうしてもベイスターズに偏ってしまうため、日頃取引をしている企業の方にも出ていただいている。例えば海外でスポーツチームやアスリート個人をサポートしているような方や、最近だとテクノロジーを駆使してスポーツをサポートすることも多いので、スポーツチームにシステムを導入している会社の社長や、他のチーム・他のスポーツの幹部の方に講師をお願いしている。</p>

		<p>○ベ이스ターズとしては、100年先もこの横浜にしっかり野球を根づかせるという大きいビジョンがある。今まではどうしても野球人口を増やすということに重きが置かれていたが、今はそれだけではなくスポーツをビジネスとして、産業として支える人材もいないと成り立っていかないと考えているため、学生向けのプログラムにも力を入れ始めている。学生に対しては、まずスポーツビジネスに興味を持っていただきたいということで、球団職員がレクチャーし、実際の仕事に照らし合わせながら選手やチームをサポートしていることを伝えている。</p>
野原委員長		<p>○まちづくりを専門にしているが、まちづくりを仕事にするというのは極めて難しく、まちづくりを勉強して、将来どこへ行ったらいいのかというのがとても難しい。クリエイティブな世界というのにも似た面があるかもしれないので、業界への入り方やリテラシーの在り方みたいなものを皆で協力しながら何か考えていくというのも、今の話と関連してくるのではないかと感じた。</p>
岡本委員		<p>○先ほど市からの報告の中で、各拠点との連携事業で新しい発見もあり、非常に価値を見いだしているという話があり、今後方向性の転換がある中、各拠点の予算は減っている、拠点スタッフの負担も非常に大きくなっているという話もあって、方向性の見直しとともに、今後、持続可能な拠点活動をどういうふうにしていくのかということも、方向性の見直しの機会によく検討していただきたい。</p> <p>○その中に先ほどのような連携事業が含まれていれば望ましいとは思いますが、各拠点に過剰な負担がかからない、より効果的な事業の在り方というのを、よく再検討していただく必要がある。</p>
事務局		<p>○御指摘いただいた問題については、非常に難しいと思っており、事業を単純に拡充するということであれば予算も拡充ということが普通だが、現在の財政の中では、プラスでやっていくというのは言えない状況ではある。そういった意味で、どういった方向転換をしていくのかをいろいろと考え、委員会の中でもお示ししていく。拠点の中でも、これまでやってきたことを全てそのまま続けるのではなくて、見直すべきところは見直してやっていかなければと思っている。</p>
六川副委員長		<p>○各事業の関係で、老朽化対策というのが課題に出てきているが、そこよりも、各施設には新しい事業の展開に集中していただいたほうがいいのではないと思う。老朽化対策について各施設に任せるのではなく、そこの部分だけを切り取って市のほうで何か対応を考え</p>

	<p>るべきではないか。象の鼻、初黄・日ノ出町だけではなく、他の施設の老朽化対策は出てくると思うが、その辺を市が全体をまとめて対応の方が効率もよく、費用対効果も出てくるのではないか。</p> <p>○もう1点、象の鼻テラスの音楽イベントでは、アーティストのセレクションは、オーディションで選んでいるのか。</p>
岡田氏	<p>○基本的には公募で選びたかったが、今年については全員を受け入れる形にした。環境的にできること、できないことがあるため、できないものはお断りせざるを得ないが、基本的にはお受けした。</p>
六川副委員長	<p>○あの場所でできるというのが知れ渡ってくると、随分手が挙がるのではないか。</p>
岡田氏	<p>○今年は感染状況も実際どうなるかがよく分からない中だったため、大々的にはやらず、小声で呼びかけをしたにもかかわらず、すぐに20組ぐらい集まってきた。</p>
六川副委員長	<p>○皆やりたいところを求めている。</p>
菅野委員	<p>○音楽イベントについては、閑散期に、余り人が入ってこないような時期に活性化を目的として開催していると伺っている。</p>
野原委員長	<p>○平準化も図っているということか。</p> <p>○1点目に関しては、市から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>○基本的に築年数の長い建物をうまく利活用していただいているので、もちろんその都度修繕する部分はあるが、長寿命化という意味では、我々の局だけではなく市全体として、建築局などの専門部署と連携しながら、大規模な修繕を計画的に入れて進めている。各拠点と相談しながら、大規模な修繕を入れ込んでいけたらとは考えている。</p> <p>○文化芸術創造都市推進部の中でもう一つ、文化振興課というのがあるが、文化振興課でも15施設ほど抱えており、そのうちの大半を芸術文化振興財団が運営している状況。これらも建てた時期が大体同じなので、拠点と同様に老朽化が問題になっている。建築局とも連携をしながら、全体の計画の中で、本当に館を休むことがないようにきちんと調整をしていきたい。</p>
野原委員長	<p>○ぜひ局間連携もして、施設活用から始まっているプロジェクトということもあり、この辺は知恵の出しようだと思う。クリエイティブリ</p>

		<p>ノベーションなどという名称で事業化するのはいかがでしょうか。実際やることは老朽化施設の修繕だが、施設そのものが元々創造施設なので、ちょっと改修しただけでもクリエイティブリノベーションと言える。その辺もうまく見せ方と実情を掛け合わせて工夫するというところで乗り越えられるものもあるのではないか。</p> <p>○ACYでは、予算の少ない中で自主事業をやっていくので多様な事業スキームを考えたり、サポートしたりすることが必要。スキームが増えたときには、人のマッチングが重要になってくる。</p> <p>○象の鼻の例も出たが、公共空間や、建物低層部、市庁舎のアトリウムなどがあり、そういう場の活用を考えたときに、拠点の情報ネットワークや人と場所をつなげることのノウハウを資源化することで、いろいろな戦略的なアプローチが取れるのではないか。</p> <p>○拠点の事業展開の場所は様々考えられる。人と場所の資産の組み合わせ方で、今までと違う事業スキームも創れることも視野に置きながら、戦略的な考え方を意識していくと、一つ一つの取組が実験となり、ヒントになっていくと思う。</p> <p>○ACYの活動の中で、新しいことをやると、新しい情報が入って新しい人がつながっていくケースが多い。場所の価値をもう1回掘り下げてみることで新たな人が参加してくれるケースも増えている。人と場所をつなげていくことを横浜の財産と考えてもいいと感じる。</p>
	野原委員長	<p>○各拠点が持っている創造都市に向けてのある種のリテラシー、ノウハウなどを全体でも蓄積して、他のところでも生かせるように集めていければ、自分のところでもさらにそれを生かすという、お互いのサポートといったこともあり得る。</p>
	遠藤委員	<p>○初黄・日ノ出町ではアートだけではなくまちづくりの話がある。アートの拠点を運営していくことと、元々のスタートであった地域の環境浄化をしていくというところがあるので、アートと地域の人たちのまちづくりを運営していくこととの兼ね合いという課題をずっと抱えてきている。今年度は協議会の事務的業務を外部委託することによって、結果的にNPOスタッフがまちづくりの事務的業務から開放されたこともあり、そこはプラスであったと思っている。</p> <p>○一方で、NPOがアートだけをやって、まちづくりは完全に外注というわけにもいかないというのが実情。その問題は切り離せないということ、令和6年度以降も委員会でも課題として共有していきながら進めるべき。協議会の事務局の運営という業務では、まちの雑用的なところまでやっているケースもこれまでにあり、そこはNPOにとっ</p>

	<p>て負荷になっていると思う。</p> <p>○まちづくりの内容は、クリエイティブな業務として、うまくスタッフの能力を生かしたものになり切れていないところを本質的に変えていく必要がある。他の拠点でも同じようにまちづくり的な課題を抱えているとしたら、何かそこを横つなぎする新しい人材なのか、1個の拠点が1個のまちづくりの課題を抱えて、それをその拠点の人材が担当するのではなくて、もう少しまちづくりの視点からの横つなぎできる人材が必要。それを令和6年度以降の委員会などでうまく課題を共有しながら、お互いの知恵や人材を補完し合っていければ良い。</p>
<p>山野氏</p>	<p>○補足だが、まちづくり協議会のほうも大きな世代交代に入っており、始められた地元の皆さんが80代、もう亡くなられている方も多い状況の中、協議会の事務作業や会議の速記録などがNPOに求められており、そういった業務については、年齢が高いスタッフや外部委託で何とか処理している。</p> <p>○それとはまた全く違う動きが最近起こっており、突然地域に哲学を専門とされているフリーランスの方が現れ、この方が20代の若い人たちを集めて、ミーティングを開いてくれている。そこに集まった20代の皆さんに何故集まったかという話を聞くと、昔、黄金町バザールでのスタンプラリーをぐるぐる回って楽しんでた子どもたちだったとのことで、昔、そういう体験があったことがきっかけでまちに対して愛着が生まれ、ミーティングに参加したということだった。哲学を専門とされている方は40代ぐらいだが、その方が若い人たちを束ねて議論の機会をつくってくれていることは非常に新しい動きだなと感じている。</p> <p>○こういったことで、NPOが何でも中心になってやらなければいけないという状況も乗り越えたと感じている。世代交代という意味も含めて、こういう新しい動きに非常に期待している。</p>
	<p>野原委員長</p> <p>○拠点運営は横にいろいろ考えながら動いていかなければいけない事業ではありつつ、スタッフの負荷とのバランスをどう取っていくかというのは、各拠点でも課題となっているため、委員会では継続的に情報交換もしながら、引き続き検討できればと思う。</p> <p>○他に意見等がなければ、審議事項1「令和5年度の各拠点の事業の仮評価と令和6年度の事業計画について」、承認ということでよろしいか。</p> <p style="text-align: center;">(了承)</p>

	<p>野原委員長</p> <p>○ここで、拠点のディレクターは退席となる。</p> <p>(拠点ディレクター退室)</p> <p>【その他（情報提供）】</p> <p>事務局</p> <p><事務局から議事録の確認依頼や今後のスケジュール等について、事務連絡が行われた。></p> <p>【閉会】</p>
資 料	<p>①次第</p> <p>② [資料1] 委員名簿</p> <p>③ [資料2] 前回議事録（令和5年11月24日開催分）</p> <p>④ [資料3] 令和5年度事業仮評価及び令和6年度事業計画について</p> <p>⑤ [資料4] 旧第一銀行横浜支店運営事業者公募の進捗状況について</p>
特記事項	